

平成21年度
日本造園学会関西支部大会
研究・事例報告発表要旨集

Proceedings of the Kansai Branch Meeting of
Japanese Institute of Landscape Architecture

平成21年10月24日(土)・25日(日)
大阪大会

社団法人 日本造園学会 関西支部
Kansai Branch of
Japanese Institute of Landscape Architecture

■ 研究・事例発表セッション（口頭発表）プログラム

< A会場：セミナー室1 >

第1セッション：10：00～11：15

近江八景小考（第15報）－八景型・変化型・名所型－

○田中誠雄 1

江戸時代の造園書に記述される庭園の「眺望」について

○李 偉（国際日本文化研究センター） 3

頼山陽の『渉成園記』にみる「渉成園十三景」の情景分析

○加藤友規（京都造形芸術大学） 5

藤原道長の桂遊覧にみる山里

○高橋知奈津（奈良文化財研究所） 7

第2セッション：11：15～12：30

『庭造図絵秘伝』にみられる鈍穴の石組構成に関する研究

○村上修一（滋賀県立大学） 9

空間装飾物と装飾対象空間の変遷について－建築空間と庭園空間に対する装飾行為から－

○町田 香（国際日本文化研究センター） 11

大正期における東京帝国大学理科大学附属植物園日光分園跡地の風致について

○西村公宏（茨城県県南県民センター） 13

近代大阪・阪神間を中心とした擬石・擬木の導入と展開

○栗野 隆（奈良文化財研究所） 15

第3セッション：13：30～14：45

寧夏回族自治区の小中学校の環境－その1－

○狩野忠正（大阪芸術大学） 17

リバプール市カルダーストーンパーク日本庭園の維持管理

○福原成雄（大阪芸術大学） 19

京都における庭園の剪定管理技術に関する一考察

○山田拓広（京都造形芸術大学） 21

横浜市よこはま動物園ズーラシア「チンパンジーの森」の設計・施工

○若生謙二（大阪芸術大学） 23

頼山陽の『涉成園記』にみる「涉成園十三景」の情景分析

京都造形芸術大学大学院芸術研究科芸術専攻（博士課程） 加藤友規

1. はじめに（涉成園の概要）

涉成園は、東本願寺の別邸として通称「枳殻邸(きこくてい)」の名で知られる。東本願寺の東方200mに位置し、面積は約35,200㎡(約10,600坪)、その広さによって百間屋敷ともいわれた。寛永18年(1641)に徳川家光より寄進されたこの地を第13代宗宣(せん)による上人が隠棲の地として整備したのが涉成園の始まりとされる。以後、涉成園は歴代宗宣が移り住んだので、隠居亭とか隠居屋敷と呼ばれることもあった。涉成園内の建物については「安政の大火」(安政5年・1858)と「蛤御門の変」(元治元年・1864)によってすべて焼失し、現在のものは明治以降の再建である。昭和11年(1936)12月16日、国の名勝に指定されている。「涉成園十三景」とは、文政10年(1827)、涉成園に来遊した頼山陽(らいさんよう 1780~1832)が記した『涉成園記』に記載されているもので、偶仙楼を除いた十二景の呼び名が今日に伝えられている。

2. 方法・目的

ここでは「涉成園十三景」に注目する。真宗大谷派所蔵資料やその他多くの資料調査を通じて、頼山陽の『涉成園記』と『涉成園十三景詠』が「涉成園十三景」に関する最も詳

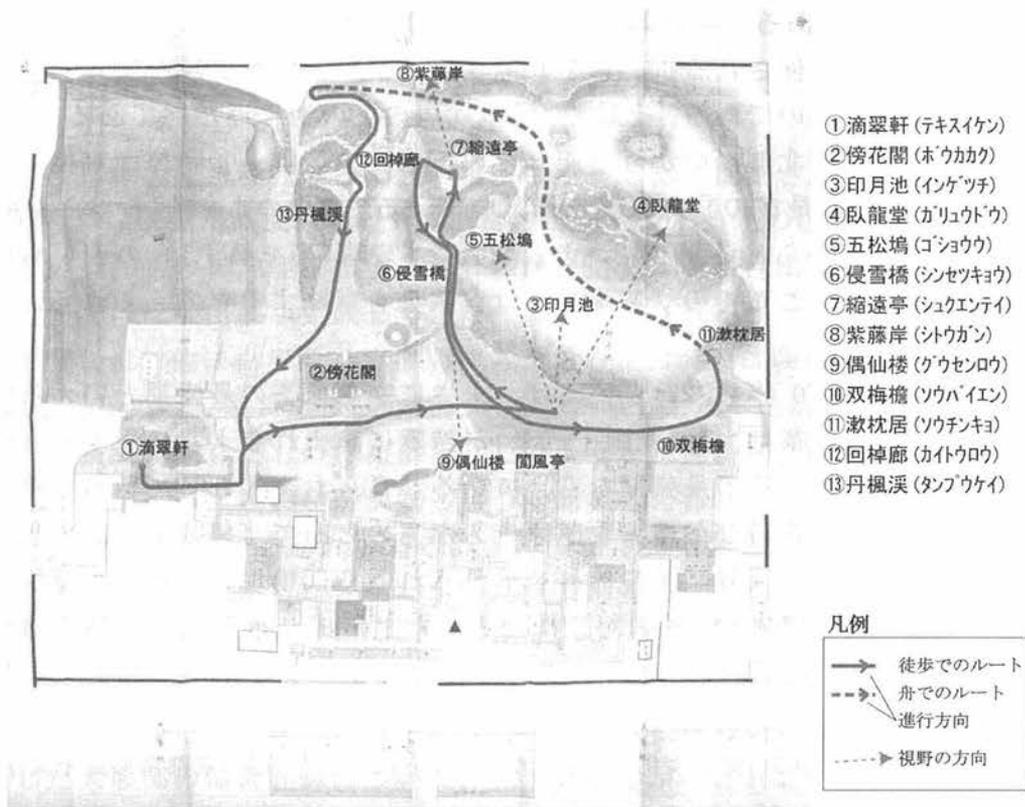


図-1 『涉成園記』にみる頼山陽の推定回遊経路図

細かつ鮮明な資料であることを確認したので、それらを通じて「渉成園十三景」の情景分析をする。

3. 頼山陽の十三景を巡る回遊経路と文人煎茶の風情

『渉成園記』から推定される山陽の十三景を巡る回遊経路を『安政度枳殻邸総図』上に記入したのが、「『渉成園記』にみる頼山陽の推定回遊経路図」(図一1)である。図の線條はあくまでおおよそ推定される回遊経路上を引いており、便宜上、山陽が『渉成園記』で紹介した十三景の順番ごとに①～⑬の番号を付した。なお、山陽の来遊した文政10年(1827)に最も近い時期の平面図は『東御殿総絵図』であるが、最も保存状態の良い鮮明な平面図である『安政度枳殻邸総図』をここでは用いた。

山陽は、現在と同様に西門より入り、まず①滴翠軒に案内され、ここからの遣水に沿った園路を歩いて②傍花閣を見た。次いで③印月池の前の芝生広場に出て右手の④臥龍堂と左手の⑤五松塙を眺めている。次いで⑥侵雪橋を渡って⑦縮遠亭に上がり、ここから⑧紫藤岸の藤棚を見おろし、ふたたび⑥侵雪橋から芝生広場に戻り⑨偶仙楼を仰ぎ、御殿南の⑩双梅檐から⑪漱枕居へ向かっている。

十三景を巡る回遊経路の中で最も注目すべきは、⑪漱枕居から舟を利用していることである。そこには文人煎茶の風情が感じ取れて大変興味深い。④臥龍堂の地は現在、南大島と通称されるが、この島にはかつて④臥龍堂と呼ばれる鐘楼があり現在は礎石のみが残っている。『渉成園記』には、「堂ニ挂ケタリ古鐘ヲ。設フル茶讌ヲ於塙ニ時、留メテ客ヲ於亭ニ、鳴ラシテ鐘ヲ報スル茶ノ熟セルヲ也。乃チ艤シテ舟ヲ亭下ニ泛ブレ池ニ。繞リテ二嶋ヲ而北スレバ抵ル橋ニ」とある。すなわち、この堂には古鐘が懸けられており、⑤五松塙の傍の⑦縮遠亭で煎茶会が催される折、客を⑪漱枕居に留め置いて、鐘を鳴らして茶の用意ができたことを知らせるのである。そして、⑪漱枕居の下の池に浮かべてある舟を出して、ふたつの島をめぐる池の北側に向かうと記している。その後は、⑫回棹廊東奥の舟着場に到着し、そこから十三景最後の⑬丹楓溪を鑑賞している。文中の「茶讌(ちゃえん)」とは、当時の煎茶会でよく用いられる用語であり、また、「茶熟(茶を熟す)」の表現も抹茶には用いられないことから、ここでの「茶讌」とは煎茶会を意味すると考えられる。

4. おわりに

山陽が来遊した文政10年(1827)といえ、まさに文人煎茶の最盛期といえる時代である¹⁾。近世日本の文人煎茶は、「渉成園十三景」が詩歌に詠まれるようになった文化文政以降から幕末明治にかけて、その最盛期を迎えている。自らも文人として煎茶を嗜んでいた山陽は、この風流豊かな舟遊びの情景を感慨一入なものとして『渉成園記』に書き記したのであろう。遠景に山を、近景に水や流れを取り入れる空間構成は、近世の「文人煎茶の庭」に共通する要素である。『渉成園記』に記された「渉成園十三景」の情景分析から文人煎茶の最盛期における近世日本庭園の空間的特質のひとつが読み取れることは興味深いことである。

引用文献 1) 小川後楽(2005):煎茶文化:庭園学講座XII近代庭園と煎茶:京都造形芸術大学日本庭園研究センター,16